

戸倉ハルとマスゲーム

塚脇澄子

(川村学園女子大学)

故戸倉ハルは、大正七年高知師範学校就任以来、府立第六高等女学校（現都立三田高等学校）、東京女子高等師範学校、お茶の水女子大学、そして日本女子体育大学、日本体育大学に於て、70有余年の間、学校体育の中でも特に女子体育振興のためにつとめられ、不朽かつ偉大な足跡を残されたのである。

今回筆者は、第二次大戦後、戸倉ハルが特に力を入れ、日本で開催された第18回東京オリンピック大会、第3回アジア大会、国内では国民体育大会、各学校での運動会等で多くの人々に踊られ、親しまれてきたマスゲームについてⅠ）「作品のテーマ」Ⅱ）「表現内容」Ⅲ）「作品の構成」について話を進める事にする。

Ⅰ）「作品のテーマ」（時代的背景による）

作品テーマをみる時、時代をわけてみる事が明解であると思われる。

① 昭和11年～25年

この時代はマスゲーム的作品はほとんどなく、唯一あげられる「田毎の月」は、ハルの好きな「水」をテーマにした作品で、内容の質の高さは、以後の作品の基礎になっていると考えられる。

② 昭和26年～35年

第2次大戦の混乱もおさまり、人々の気持ちにも余裕が目立ち、美しいものをみて感動し動いて楽しむという時代になると同時に、国内においての「国民体育大会」の開催、また昭和29年には「日本体操祭」も復活し、体位向上をめざす目的と同時に、大会に“華”をそえ、観衆をひきつけるという大きな意義をもつマスゲームが盛んに行われるようになった。テーマは、花や水など自然をとりあげたもの、季節的なもの、更に民謡をグランド行えるようアレンジした曲を用い、動きはマスゲーム用に創作されたものが発表された。

③ 昭和36年～43年

この時代は、昭和39年に行われた東京オリンピック大会を機に、各種国際大会のためにマスゲームが盛んに行われ、マスゲーム全盛の時代であった。このような時代であったため、ハルは、国際大会のためには「より日本的なもの」を外国人に見せたいとの強い気持から、テーマのみならずすべての面にきめ細かい研究を続け、内外の関係者が絶賛した「六段によせて」「春を想う」という、まさに日本を代表する“桜”“扇”をテーマにした珠玉の作品が完成したのである。更に、

歴史に興味をもっていたハルは、それらをテーマに古を偲ぶ作品も多く手がけた。

Ⅱ）「表現内容」

ハルならではの肉面的豊かさが、どの作品にも豊富にあらわれ、踊る者の心をとらえ、豊かな世界へとさそうようである。

題材として多く用いられているものは「花」「水」であり、季節的なものとしては、「春」をとりあげているものが多くみられる。

Ⅲ）「作品の構成」

① 動きの面からは、数多くのステップが全作品に多く使われ、上体の動きは、ハル特有のやわらかい動きで、全作品にみられる。

② 「集団的側面」（隊形と人数）からは、全作品どこかに円が使われており、これは長い経験から生かされたハルの巧みさと思われる。

③ 「効果的側面」（音楽と手具）音楽に於ては日本人による作曲のものが全体の2/3をしめており、日本人の心をいかに大切にしているかが測り知れる。手具の面においても、日本特有の「扇」を十分に生かしている。

以上のように戦後ハルが数多く手がけたマスゲームを通して、改めて思われることは、ハルのダンスに対する変わらぬ信念、態度が、持ち前の文学的素養、美的感覚等が豊かな天分と相まって「人の心をゆり動かす、心のあるマスゲーム」の数々となったのであろう。

教育的価値のあるマスゲームが、再び各地で、くりひろげられる事を願っている。